443

特246
977

皇國日本の使命

——世界は動く——

帝國飛行協會

0001897000

0001897-000

特２４６－９７７

世界は動く

井上四郎・著

帝国飛行協会

昭和１０

AAC

皇國日本の使命

目次

世界は動く……一
世界の二大文明……二
東西兩文明接觸の第一期……三
東西兩文明接觸の第二期……五
世界制壓の要素と皇國の西漸……八
東西兩文明の差異……一一
自給自足文明の發達の要素……一三
交換貿易文明の發達の要素……一四
自給自足文明の發達と凌落……一六
交通交換文明の發達と凌落……二一
兩文明と日本の相異……二八
日本の天地人……三二
現在世界不安の基因……三四

特246
977

世界中心の移動と皇國日本……三八
日本の不安……四三
航空機の絶對價値……四四
航空機整備の對策……四六
米國の航空第一主義……四八
我が國防……五〇
國家總動員の現出……五〇
國民的思想訓練の緊要……五一
海軍と陸軍の特色……五三
空軍整備の急務……五四
皇國日本の大使命……五五
航空と國民生活……六一

——目次了——

皇國日本の使命

世界は動く

世界全土は今や底知れざる不安におの〻いてゐる。非常時は我が日本のみでなく、英米、獨佛伊、いづれを見るも不安と動搖なき國家を見出す事は出來ない。特にそれは歐米に著しく、最も文化の進んだ國ほど、先進國ほど一層甚しいものがある。歐米各國に比すれば、まだしも皇國の非常時は輕いとも云へよう。

この世界不安の最大原因は何か。一言にして云へば、それは謂ふところの『西洋文明』の行詰りに因る世界的危機の切迫を反映せるものに外ならず、西洋文明の沒落を如實に具現してゐるものである。

この中にあつて非常時にして國難多岐とは云へ、皇國日本は眼覺しい躍進を示し、各方面に亙つ

て世界的進出を見せてゐるのは、文字通り『光りは東方より』の實體を示してゐるが如く、西洋文明沒落の一面の理由として見る時、興味ある問題を與へてゐる。

云ひ換へれば先進國の沒落は、東方の光明が、即ち日本の光りが全世界に光被しつゝある力强き事實でもある。

何故に斯く一は衰退し、一は隆興しつゝあるか！

徒らに日本の躍進の誇りのみに安んぜず、暫く顧てその因つて來る所以を究め、もつて今後の躍進日本に備へると共に、一方躍進の裏面には、絶へず留意すべき國防に意を用ゆるは勿論、更にこれによつて人類文化の發展に資するは我等の使命と信じ、玆にいさゝか、人類過古の歷史より世界文化の興亡盛衰をたづねて、希くば未來、萬代の策に思を至さんとするもの、幸ひに江湖の示敎を賜はらば、筆者の光榮これに過ぎるものはない。

世界の二大文明

人類は過古數千萬年の努力經營によつてそれ〴〵天地の環境に基づき、數多の文明を建設したが、その中に最も大いなる、併せて有力鮮明なる二つの文明を建設した。

その一つは東方亞細亞に發達した東洋文明であり、その一つは歐洲に發達した西洋文明である。

この二つの文明は、有史以來五千年、時に、東力の西漸を示し、時に西力の東漸を顯し來つた。而してその勢力移動の現象には、自らそこに一定の規律を發見し得るのである。即ち西洋文明も、東洋文明も、共に極端にして中庸を失し、隨つてその何れかの一つの文明のみを人類が辿つた場合には、それ〴〵重大なる弊害を伴ひ來つたゝめ、時には東力の西漸、時に西力の東漸が行はれ、自然の裡に調和し中道を踏み、人類全般の向上進歩に寄與してゐる。

この世界の二つの文明、東洋文明と西洋文明が、單に東洋文明のみで足らず、また西洋文明のみでも同樣、人類の向上に不可なる事は、次に兩文明の接觸の跡と、興亡の歷史を示せば明瞭なるものがある。

東西兩文明接觸の第一期

曾て、波斯によつて代表せられたる東洋文明が偉大な發展を遂げた時、即ち皇紀一八一年、波斯王クセルキセスは七十萬の大軍を率ひて、西洋文明を代表せるギリシヤ遠征の途に上り、七千人の將兵が死を賭してテルモピレの險を扼したギリシヤ王レオニダスの軍を破り、首都アゼンスを陷れ、いまやギリシヤの運命も旦夕に迫つたが、遂にセミストクレスの智謀に破れ、ペルシヤ海軍はサラミスの海戰に潰滅して、波斯王クセルキセスの蓋世の雄圖も遂に水泡に歸せざるを得なかつた

のである。

かくして東洋文明の代表とも云ふべき波斯王が遠征に失敗してより、西洋文化は日に月に向上し、アレキサンダー大王現はれるや、その勢ひ旭日昇天を示し、皇紀三二七年には、逆に亞細亞遠征の戈が向けられ、その領域は實に東はインダス河に接する大帝國の建設となつたのである。

アレキサンダー大王沒後、忽ちその廣汎なる版圖は四分五裂せるも、次で、ローマ大帝國の建設によつて、再びこれが統一せらるゝに至つた。

ローマは、西洋文明の本流たるギリシヤ文化を繼承したるもので、よく之を大成し、世界文化の向上に資する所大なりしは、歴史上顯著なる事實である。

かくの如く、皇紀三二七年アレキサンダー大王の東征より、一、一三五年西ローマ帝國滅亡まで大約八百年間は、實に西洋文明全盛の時代であつて、所謂、西力の東漸をなしたる黄金時代である。

然しながらローマ文明が、一度その向上を停止し、内部的腐敗を起すに至るや、直ちに東力の西漸となつて、東洋文明の擡頭が顯著となつた。

即ち一、一〇一年、匈奴はアツチラーによつて猛威を奮ひ、東ローマ帝國を犯し、遂にローマに迫り、一、二九〇年にはアラビアに起つたサラセン帝國が小亞細亞を統一し、北亞弗利加を征服し、遂にジブラルタルを渡つて西班牙に入り、一、三七一年西ゴートを滅するに至つた。

一、五五五年、マジヤル人はカルパシヤン山脈を越へて東歐を犯し、遂にハンガリア王國を建設し、また一、八八五年トルコの酋長スレイマンは、約五萬人の遊牧民を率ひて、アルメリアに移り、二、一一三年遂にコンスタンチノープルを陷れて、歐亞に跨る大帝國建設の覇を唱へた。

更に一、八六六年、成吉思汗によつて大發展をなしたる元の第二世大祖は、拔都を西征將軍として露西亞、ポーランド、オーストラリアを犯し、一、九〇一年ワールシュタットの戰役には、歐洲の聯合軍三萬を擊破し、第四世忽必烈に至つて、遂に東西兩大陸に跨る大帝國が建設され、二、一四〇年に至る迄二四〇年間露西亞を統治して居た。

かくの如くして、西洋文明の代表者ローマ帝國の衰微現はれ、勾奴の歐洲侵入が始まりし一、一〇一年より二、二三一年、土耳古がレバント海戰に於て、その海軍を破られ、遂に衰運に傾くまで、約千百年間は、所謂、東力西漸の時代をなしたのである。

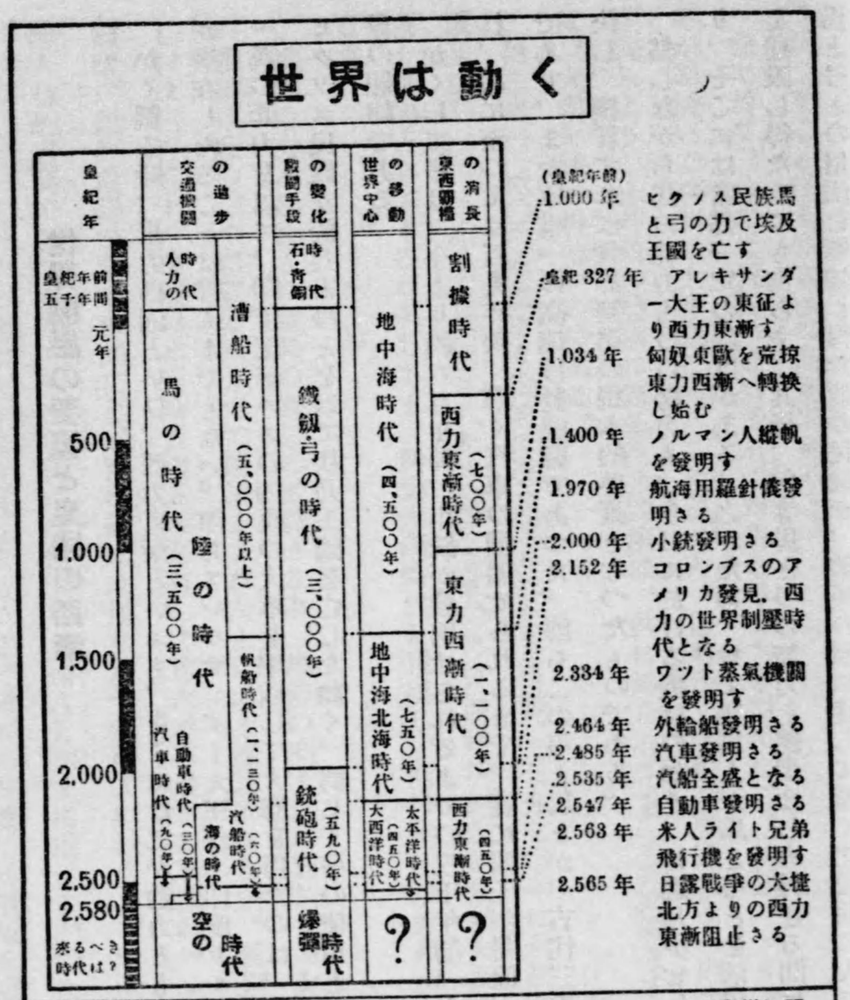
東西兩文明觸接の第二期

中世紀の暗黑時代に閉されつゝありし歐羅巴は、大約千年間の苦闘の後、再び目覺むると共に、その先驅者たるコロンブスは二、一五二年アメリカ大陸を發見し、相繼いで、世界到る處に根據地を占領し、更に二、四三四年、ワットの蒸氣機關發明は、この趨勢に急激なる拍車を加へ、世界に

散る根據地はいよ〳〵擴張され、遂に之が有力なる植民地となつて、西力は頓に增大するに至つた。即ち二、五〇一年、英國は香港を占領し、二、五五八年米國はハワイ及びヒリッピンを合併し、獨逸は膠州を租借し、また二、五六二年シベリア鐵道は開通し、全世界は殆んど西洋文明の支配下に威服され、皇國日本こそは、この東西南北より壓迫する重圍の裡に孤立の狀況であつた。

然るに二、五六五年、皇軍は奉天と日本海に於て曠古の大勝を博し、みごと北方よりの西力東漸を阻止せる世界歷史上畫期的轉換をなすに成功した。次で西洋文明の腐敗は、遂に世界大戰の勃發を促して、こゝに西力は著しくその勢力を減殺され、膠州灣、威海衞の還付行はれ、更に吾人の記憶にも新たなる如く、滿洲國承認問題に於ては、我國は四十二對一といふ西洋諸國の高壓的反對をも敢然として斥け、獨力を以て東亞の平和を維持し、人類の福祉增進に大なる力を與へた。

しかも亦、滿洲國承認問題に關聯し、惹起するにあらずやと虞れられたる海上經濟封鎖を阻止し得たるは、かの日清役後三國干涉によつて遼東還付の苦盃を嘗めたるに反して、實に海上制壓を以て世界に君臨せる西洋文明の重壓を敢然排除したるものにして、四百四十餘年前、コロムブスのアメリカ發見以來、はじめて見る大事件である。いまや西洋文明は、恰もローマ大帝國の末期の如く、腐敗沈滯に陷りつゝあるは何人と雖も否定し得ざるのみならず、その一方には、恰も旭日の東天に昇るが如く皇國日本の進展目覺しきことは、また何人と雖も見逃し得ぬ事實である。



新しき科學と機械を以て西洋文化は世界を制壓した。この新文化が東洋に理解運用せらるゝや、その旺盛なる生活力との協和は克く西洋の覇權を覆へし全人類文化の向上に貢獻した。今や、東洋にも汽車、汽船の海陸平面的文化は普及し、東力西漸の徴を示しつゝある。然りと雖も茲に更に新たなる航空機と爆彈の立體的機械を武器として西洋文化は世界を制壓せんとす。須らく飛行場を作り、輕飛行機を普及し、飛行士を活用し、以て航空日本の基礎を築き、東洋永遠の平和と世界人類の福祉に努むるは皇國日本の使命である。

世界制壓の要素と皇國の西漸

かく觀る時、東力西漸といひ、西力東漸といふも、そこには之が動力ともなるべき何等かの要件が潜在したることは言ふまでもない。卽ちアレキサンダー大王が、印度カルリの平野に於て、僅か一萬の兵力を以て、印度王ポルスの四萬の大軍を擊破して大勝を得たのは、恰も三千五百餘年前、ヒクソス民族が騎兵と弓とを以て埃乃王國を亡した如く、同じく弓の使用と騎兵の果敢なる迂回攻擊の賜物である。

かくして弓は、今より約六百年前、小銃が發明せられるまでの三千年間、主要武器として尊重され、馬に至つては百九年前、漸く汽車の發明せられるまで、實に四千年間餘も人類の主要交通機關であり、また軍唯一の高速移動機關であつた。卽ちこの弓と馬とが、古代三千年間の戰爭の勝敗を決し、換言すれば世界制壓の根本的要素となつたものである。

然しながら馬の能力も弓の勢力も、今日に於ける機械の如く、日進月歩せしむることは困難であり、そこには當然一定の限度がある。之がため、曾て羅馬人が馬と弓とを活用して、世界的大帝國を建設し得たるにも拘らず、其後、何等馬と弓の能力を進歩せしめ得ざる間に、羅馬に後れてこの馬と弓との用法を傳知し得た他の民族が、繁榮の極に達して漸く沈滯期に入れる羅馬帝國を脅かす

に至つたことは至極當然の結果であらう。

玆に於て、曾ては羅馬の武器であつた馬と弓の力を逆用して、勾奴、マギヤル、サラセン、蒙古等が相繼いで歐洲に大脅威を與へるに至つた。卽ちかく羅馬の興隆による西力東漸、或は勾奴の歐洲侵入より、土耳古の發展に至る東力西漸は、共に馬と弓とを主要武器とする根本的要素に於ては、大差を認め得ないのである。

然るに一、四〇〇年頃より縱帆に改良せられたる帆船、一、九七〇年に創製せられたる船舶用羅針儀及び二、〇〇〇年頃に發明された小銃により、再び西洋は絕對的優越を示すに至り、最近、四百五十年間といふものは又しても、西力東漸時代を現出し、西洋文明は世界に氾濫し來つたのである。

帆船の力と小銃とは當時の無二の武器となり、地形の利も之に對抗するを得ず、今日の世界地圖の基礎は此の二つの武器によつて略決定されたといふも過言ではない。世界史上最も悲慘なる例としトは三百五十八年前、八百萬人の人々を有して居た世界最古の文明の一つであるペルのインカ王國は、此の武器の爲めに滅亡し二百年前には僅か六十二萬人に減少し、サン、ドミンゴ島は發見當時人口約百萬であつたが、十五年後には僅かに六萬人を剩すに過ぎなかつた。

如斯き慘事は、實に皆此の小銃の威力であつて、如何に有效に其價値を發揮したかを窺ふに足る

ものである。當時ペルは銅器時代であつて文學もなく、到底之に對抗し得る武器を備へてなかつたのと又直ちに習得應用するの智力に缺けて居たのである。又濠洲土人の滅亡も文明の利器に恃む英國人の慘虐行爲によること多しと非難されてゐる。正義、人道、博愛を唱ふるキリスト教徒の崇高なる教義は白人種にのみ行はれ、異人種に對して如何にも無慈悲慘虐を極めたものであつて、吾々日本人の想像し得ざる處である。而して海上の兵船は古代では奴隷の手で漕がれたガレー船であつたが、亞米利加發見後は漸次帆船に變化するの趨勢が現はれ、此の新傾向を逸早く達觀した英國は帆船艦隊を整備して、一、二、二四八年西班牙の舊式ガレー船で編成されてゐた無敵艦隊と稱へられたる大艦隊を擊破して遂に今日の海上王の基礎を築く機運を捉へたのである。我國の例をとれば去る卅九年前の日清戰爭で九月十七日の黃海海戰は舊式の据盤砲を備ふる支那北洋艦隊に對して、新式速射砲を備へたる我艦隊の勝利は卽ち新兵器の優越を實證化したものと謂へるのである。

然し今や時代は、更に三轉せんとし、明治以來、僅に七十年に足らざる間に於て、西洋文明を消化し得たる皇國日本は、さきに西洋人が世界制壓に使用したると同樣の銃砲及び船舶の力により、遂に東力西漸の趨勢を顯すに至つたものである。これ一に歷史は循環するといふ古諺に從ひ、今は昔、匈奴等が勃興せる時に於けるが如く、今次の西洋文明發達の要素となりし蒸氣機關が、既に西洋に於て停頓し、新たに之を習得して逆用しつゝ、今や皇國日本が歐洲に一大脅威を與へ、將に以

て肉薄せんとするものに外ならない。

東西兩文明の差異

玆に於て、また東西兩文明の本質的差異が、その發達過程に興味ある特性を現はしてゐることに氣附かざるを得ない。卽ち、西洋文明は、交換貿易を主とするものであつて科學を基礎とし、之が研究は誠に旺盛であり、機械の發明、或はその應用に於て、西洋は確かに吾々より一日の長を有してゐる。隨つて器具機械に關する新たなる武器によつて、常に東洋文明を制壓してゐることも否むことは出來得ない。然しながらその反面には、彼等は農業といふ自給自足の自然的生活法には長ぜざるを以て、困苦缺乏生命の繁殖增加と云ふ點に缺けるといふ結果が示される。

然るに東洋は、自給自足の天地自然の生活を基礎とせる偉大なる文化には惠まれてゐるが、その反面には、機械器具の發明に適してゐるとは云へない。故に新機械器具の案出に於ては劣るところあるも、その民族性はよく消費節約困苦缺乏に耐ゆるを以て、上述せる歷史を一見しても分るが如く、東西共に同一兵器を用ゆるに於ては、よく西洋を壓迫制覇し得るのである。この事實こそは、東西兩文明の觸接に於て、殊に見逃し得ざるものでなければならない。

更にまた西洋文明は、交換貿易の文明であつて、利益の蒐集獲得には、これ努めるが、土地その

ものには生命の根をおろし、また植付けるまでには至らない、反對に東洋文明は、自給自足の農業を基礎とするを以て、自ら土地に定著固定の運命をもつてゐる。例へば今日フインランド人、エストニヤ人、ハンガリー人、土耳古人など、過去に於ける東力西漸の優越時代を尙現實に物語る東洋人が、歐洲人の間に介在定著し居るを見ても明かである。現にまた今日、我同胞は北米に南米に、排斥の聲を聞きながら尙且、移住定著してゐるではないか。然るに羅馬時代は勿論、最近四百五十年間に華と咲きたる西力東漸時代の跡を物語るべき何等の根據も、西洋人に於ては、これを東洋に發見することは出來得ない。こゝにまた吾人は、東西兩文明の重大なる差異を認めざるを得ないのである。即ち西洋の文明は機械の文明である。東洋文明は生命の文明となる結論に到著することが出來得やう。

即ち亞細亞の文明は、自給自足、消費節約生命增加の文明にして、西洋の文明は、交換貿易、生活向上資本集中の文明と云ふことが出來る。

この二大文明は玆に、自給自足の東洋文明、交換貿易の西洋文明と稱し得るが、この二つの文明が發達したる要素原因は何であるか。

從來、謂はれたる如く、東西の人種の相異に基因するものであるか、否、筆者は、必ずしも人種の相異のみに非ざるものとす。

即ち見よ、彼の印度人と西洋人の如く同じアリアン人種でありながら、偶然、東したる印度人は自給自足の亞細亞文明を、西したる西洋人は、交換貿易の西洋文明を建設したるを見ると瞭かである。

筆者はこの二大文明發達の根本原因は、畢竟天地の相異であり、各々相異せる天地の理に順應して、最もよく天地の德を發揮したる人種が、その土地にそれ〴〵の文明を發展せしめたるものであると信ずるものである。

故に更に筆を進め、その二大文明、自給自足の文明と、交換貿易文明との發達經緯を比較檢討して、皇國のとるべき途の一助としたい。

自給自足文明の發達の要素

印度、支那の天地は地積は廣く、全般的に溫度高く、雨亦繁く、且つ高溫季節に雨量多く一般植物の繁殖に適し多量の穀物が生產される。從つて穀物をよく作る民族が、此の天地に發展したのであつて、即ち生命の增加と共に土地の耕作を增し、基督の所謂生めよ、增へよ、地に充てよを如實に具現したものである。

然しながらその反面には、この土地を交換貿易の立場がらみれば極めて不利な位置にあり、地の利

に惠まれて居らぬと謂はねばならぬ。何故ならば太古の交通機關は舟と馬であつて、舟を利用した る河川はあるが、各河川が海に注ぐ所は楊子江や、インダス河の如く直に怒濤逆捲く太平洋、印度洋であつて、幼稚な河用船より海上交通船に進歩するに極めて不適當である。且つ陸上交通の馬の利用も亦天山山脈、ヒマラヤ山脈によつて支那は印度及歐羅巴と交通を遮斷され、唯一の交通路たる西比利亞方面は地理的に馬の利用に發達せる胡人によつて占領せられ、如斯き地理的原因のために交換貿易は支那印度の方面には發達しなかつた。如上二つの天地に歸因する原因によつて、支那、印度に交換文明のない自給自足の農業文明を發達せしめ得る民族が發展したのである。

交換貿易文明の發達の要素

交換貿易文明の發達したる歐羅巴は、亞細亞と全く反對の天地を有し、その地積は狹く、全般的に溫度低く雨量は尠なく、且つ高溫季節に於ける雨量の缺乏は自然に植物の繁殖を阻害し、農業に不利であつて、米作に適せず、麥作の外なく、古代は勢ひ牧畜を主として居たものである。然るに地形上地中海と云ふ湖水にも等しき潮の干滿なき海を有し、而も世界最古の文明發祥地たるチグリス・ユーフラテス河と云ふ印度と西洋を連絡する河に發達したる舟の文明が、地中海西部パレスタイン一帶を占領せるフエキニヤの交換貿易文明となつて現はれ、造船術の發達は交換貿易の範圍を擴張

列國の現狀（昭和九年調）	本國面積 萬平方粁	耕地面積 萬ヘクタール	人口 萬人	鐵道 萬粁	自動車 萬臺	汽船 萬噸	出入船舶 萬噸	貿易 %		人口增加率 千人ニ付	
調査年（皇紀）	2593	2591	2592	2591	2592	2593	2592	2573	2592	2573	2592
世界	12,990	—	200,000	124.0	3.360	6.647	—	100%	100%		—
日本	38	590	6,630	2.2	10	410	10.795	1.6	3.7	14.9	15.2
英國	25	500	4,904	3.3	141	2.158	10.945	164	15.0	10.3	3.5
印度	468	12,546	35,145	6.9	17	—	1.442	3.3	2.7	9.8	9.2
ブラジル	784	13,840	12,407	41.9	2.432	1.266	9.816	10.3	11.2	13.1	6.6
米國	753	—	4,027	3.6	—	49	—		—		—
佛國	55	2,216	4,184	4.4	169	347	9.714	7.1	7.4	1.1	1.5
獨逸	47	2,049	6,559	5.8	65	389	5.077	11.9	9.5	13.6	4.8
伊國	31	1,378	4,161	2.3	32	309	3.875	2.9	3.0	12.9	9.2
支那	992	—	44,109	2.0	4	40	—	1.8	2.0		—
露國	2,135	12,585	16,317	7.8	6	84	—	3.6	2.5	17.0	17.0

し、貿易の中心は西部よりギリシヤ、羅馬、ゼノア、ヴエニスと漸次地中海の西部に移り、一方バルチツク海の交換文明の發達と共に地理的中心たる西班牙、葡萄牙に移り、遂に亞米利加發見と共に大西洋の樞軸たる英國に移つたのである。勿論英國が最後の海上覇權を掌握する迄の惡戰苦闘に耐へたるは人種的影響の大なるを認めざるを得ない。如斯農業に不適當なる歐羅巴には、歴史上自給自足の農業國民として大なる發展をしたる民族はない。何れも交換貿易

文明の發達歴史であつて、交換貿易の範圍の擴張によつて絶へず移動し、而も各時代の中心地に住する民族が、其の時々發展したのである。如斯く西洋の交換貿易文明の發達も亦天地の影響であつて、其の利を最大限度に發揮した英國人が最も發展したものであると信じられるのである。

自給自足文明の發達と沒落

自給自足文明は相當廣大なる地積を有し、雨量に惠まれ、しかも國防上自然の天險を具有せる地方に發展せるものにして、古代バビロニヤ、埃及、印度、支那、メキシコのユカタン、ペルーのインカ王國等であつて絶大なる天地の惠に浴して居る。從つて生命の增加は耕地の擴張に比例して人口はどし〳〵增加する。然し自給自足文明の當然の性質として交通交換の便に缺如せるため其の地積以外に發展の道なく、機械の應用も發達せず、天地の生產物も歷史的祖法を遵守するのみにて科學的方法によつて生產增加を計ることを得ない。即ち限りある地積の耕地擴張不能となれば消費節約によつて生命の增加を計る外に發展の途はない。支那の衣食住は最も發達せる自給自足文明の消費節約方面に於ける發達の極致を如實に示すものである。此の消費節約こそは人類文化の崇高なる美德の一つであつて自給自足文明のみによつて涵養されるものである。此の美德は民族の生命を永遠に傳ふるものであり、人類の尊重すべき一つの文化である。

交換文明は個人を主とするものであるに對し、自給自足文明は天地を主とするものであるとも云ふべきである。即ち交換文明は個人の收益を主とするものであるから農業を經營するにしても大農法が行はれ、自給自足文明は天地開發を主とするものであるから小農法となる。從つて一定地域の收穫は大農法よりも、小農法による結果が多大であつて、多數の人口を一定地域に收容し得るものであることは云ふ迄もない。其の反對に個人的收益は小農法よりも大農法が多大にして、人類生活としては大農法は小農法に比し高度の生活を營むことを得るものである。如斯自給自足の文明は小農法によつて一定地域內に最も多數の人口を收容し、土地に定著するため必然的に家族制度の發達となり、家族的親類關係の相互扶助の思想を涵養發達せしむるものである。然し地理的に交通交換連絡が缺如せるため、眼界は地方的に極限せられ、世界的文明、智識の吸收、普及困難となつて、民族的、國家的統一精神の發達不充分となり、統治者の人種、民族的歷史などに對する反應稀薄にして、唯、徒らに物事を天命と信ずる如き、大きな缺陷を生ずるに至つたものである。

思ふに今日と雖も、支那人、印度人の大部分は、自己及びその周圍の小範圍の歷史的天地あるを知つて他に幾多、波瀾重疊千變萬化しつゝある現代世界の風雲を感知して居ないであろう。即ち前記自給自足の極致であると共に、その缺陷を代表せる最たるものである。

如斯天地の恩惠に馴れて、祖法に順應するのみで事物に對する研究心尠く、不知不識科學の發達

せざる根本原因をなし來つたのである。そこには勿論文字上の關係もあるが、實は文字の發達夫れ自體が、既に天地の影響によるもので交通交換なきところに文字發達を缺くのは必然の理である。また科學の應用に拙劣なるため農業の生産增加も耕地面積の增加による外なく、治水事業等發達せず、今日我國に於て盛んに研究されつゝある多收穫農法の如き印度、支那に於ては見ざる所である。自給自足文明發展の自然法則たる生命の增加は、耕地の擴張に依存するものなるを以て、耕地擴張の不可能となりたる支那本部に於ては、最近二百年間三億萬人より僅かに四億萬人に增加したるに過ぎず、最近長足に進歩したる科學の恩惠によつて歐米の人口が二倍に增加したるに比すれば、如何に現代文化の恩惠に浴すること尠きかを知るに足るものがあつて、自給自足文明の一大缺陷なりとす。

自給自足文明は科學に無關係の傾向がある。從つて新たなる科學を建設したる文明と接觸する場合には或る民族は滅亡し、或る國家は破壞さるゝのである。中央亞細亞に起りたる古代の自給自足の文明は天地自然の地形的防禦薄弱のため幾多興亡のあとを殘し、埃及の二千年の自給自足文明も馬と弓のため破壞され、古代地中海のクリート文明も、ギリシヤの鐵劍のため滅亡され、近くは帆船と鐵砲のため、南米では二千萬人以上の自給自足文明の民族は殺され、滅亡し、世界至る處の自給自足の民族は征服されたのである。

支那が今日獨立を維持して居るのは支那そのものゝ力のみではなく、東亞の盟主たる皇國日本の嚴然たる存在の結果であることは否定することの出來ない事實である。幾多自給自足文明は、その發展途上交換文明との接觸に於て一再ならず沒落したる歷史的事實は何人も知るところであらう。

これは一つに交換文明の武器が優れたる結果によるものである。

五千年の歷史を見よ！

馬と弓、鐵劍、ガレー船の使用、縱帆船、コムパス、鐵砲等の有力なる武器によつて幾多の自給自足文明は沒落させられて居る。然し一度その武器の進歩が停滯するや、その重壓に耐へたる自給自足の文明人が、その交換文明の武器を應用、馴致し、逆にその强力な困苦缺乏に耐ゆる生命力が加つて、忽ち交換文明を壓倒したる記錄の連續に外ならないのである。

即ち交換文明人によつて發明された優秀な武器が、生命力の旺盛なる自給自足文明人の手に移つた時は自給自足文明は、交換文明を凌駕するはるかに强力なものとなつてゐるのである。

故に支那・印度の廣大なる天地に發達したる偉大なる自給自足文明の將來は輕々に論斷することは出來ない。蓋し消費節約の自給自足文明は人類文明の一大文化である。人類は過去幾千萬年の歷史を有すると共に將來又永遠である。最近四百五十年世界を支配せる交換文明の現代思想を以て自給自足文明の價値を評價しては大なる誤謬を生ずる。

支那、印度の將來は輕々に論斷することは出來ない。今日彼等は科學にも、世界交通にも風馬牛であらう。而して交換貿易の利を占むるは蓋し泰西人の得意とする處であるが、交換貿易發展のためには印度、支那の交通交換を發達せしむる外なく支那、印度を交換貿易の過程に入れることによつて泰西人は益々利益を得ると共にその結果は支那、印度人を徐々に交換文明の競爭者として敎育することゝなる。現在綿絲製品には支那、印度は泰西に對して有力なる競爭者の立場にある。

消費節約と云ふ人類最大の美德を有する彼等とは何ものと雖も生活力に於て競爭することを得ない强固なる基礎を保有して居る。恐らく今後もその生活力を以てすれば決して泰西の敗者とはならぬばかりか、泰西人が印度支那に生命を確立する事は永久に不可能ならん。然り千波萬波の機械文明も來れ、幾千萬億圓の資本主義も侵入せよ、而も彼等の天地は永遠に彼等の所有である。

如何に交換貿易の文明が進步し、その生產が增加するとも、それは鑛物の如く、天地蓄積資源の採掘等による限度ある生產か、又は農業生產品の加工品であつて、交換文明そのものゝみが獨立して永遠に存續すべきものではない。交換貿易の文明は自給自足文明の發達によつて市場の擴張と共に發展するものである。然しまた農業は天地と共に永遠に存續すべきものであるが、交換貿易文明の科學的知識を吸收するにあらざれば、その生產は增加せざると共に利用價値も增加しない。

自給自足文明は、交換貿易文明と共に人類の二大文明であつて、之によるにあらざれば世界の天

地を開發することは出來ないとゝもに、又孤立割據、獨善の文明であつて交換文明と同樣に大なる缺陷を持つて居ることは認めざるを得ない。生物が男性と女性の如く各個としては缺陷あつて子孫の繁榮は出來ないが之が一體となつて生々無息、永遠に連結する如く交換貿易文明と自給自足文明とは獨立しては發展向上することは出來ない。一方に偏するときは必ず發展のあとに沒落がある。

交通交換文明の發達と沒落

西洋に發達したる交換貿易文明は人類の向上進步に資すること絕大であつて、自給自足文明と共に、人類幾千萬年の努力によつて建設したる二大文明である。然るに過去の民族、國家はこの交換貿易文明の競爭場裡に於て、その指導權を掌握し、一時偉大なる發展を遂げたるあとには必ず火の消ゆる如く沒落して居ることは西洋史に明かである。

交換貿易の文明は、古代印度と歐羅巴の中間フエニキヤに起つたのが歷史上最初のものであつた皇紀年前三百年頃に至つて、チル市民は皆王公の如く富んで居たと謳はれた程發展したと云ふことである。フエニキヤに次でギリシヤの發展となつて人類文化の基礎を築き、次でローマ大帝國の統一となつて古代文化の最高峰をなす大發展を遂げた。然るに皇紀八百年頃よりローマの腐敗と共に交換貿易は衰微に向ひ、遂に中世紀の交換停止の暗黑時代を生ずるに至つたのである。

歐羅巴は約千三百年間の長い交換停止の暗黑時代の大試練を經て、二千百五十二年コロンブスのアメリカ發見となつて再び交換貿易は發展の機運に向つた。しかも科學の進歩に伴つて貿易品の種類と生産額は頓に增加すると共に、交換貿易の範圍は擴張され最近百年遂に世界貿易時代を現出して前代未聞の大發展を遂げ、交換貿易の世界制壓となつて交換貿易の文明は人類唯一の文明であるかの感があつた。然し其の發展に伴ふ內部的腐敗は世界大戰となつて、遂に世界不況を招來した。今日各國は經濟ブロックの形成、金輸出禁止、關稅の障壁等によつて交換貿易の自由を制限せんとするに至つたのは、ローマ末期の狀況に髣髴たるものあるを思はしむ。

古代ギリシヤ、ローマの交換貿易の範圍は、地中海を中心とするものであつて發展期間は約八百年に及んで居た。今日の歐、米の世界制壓は、初めは主として大西洋を中心として發展したものであつて、約四百五十年間に亘つて世界的交通交換貿易時代となり、次で汽船の進歩に隨ひ、約六十年、交換貿易萬能時代となつた。

此の交換貿易文明の發展階級に於て指導的位置を占むる民族、國家は時代と共に移動變化して居る。卽ち交換貿易文明の中心は、北半球の溫帶を地球の回轉と反對に東より西に向つて移動しつゝあるを見る。卽ち最初地中海東岸のシドン市、チル市から發展して、ギリシヤ、アテネ市に移つて遂にローマに至り、地中海を中心とする古代史の綜合統一文化を建設して中世紀の暗黑時代に入つ

たのである。現代に於てはスペイン、ポルトガルの發展より蘭佛を經て英、米の大西洋中心の交換文明の大發展となつて、今日其の中心位置は將に現代世界人口の過半を保有する東南亞細亞の中心日本に移動せんとする狀勢を呈し、歐羅巴は再び中世紀の暗黑時代に還らんとするかの感がある。

而して交換貿易文明の中心位置を占めて大發展を遂げたる民族、國家は地理的位置、地域の廣狹民族的性質の優劣、民族數の多少と競爭的立場にある民族、國家との關係上發展期間の長短に相違はあるも長きも三百年、短きは五、六十年にして沒落、衰微の悲運に陷る必然性を持つて居ることを過去の歷史は示して居るかに見られる。常に各時代の交換貿易の指導的立場を獲得する民族は、必ず農業國として長き歷史によつて優秀なる民族的精神を養成したるものであつて、交通機關の進步に伴ひ、交換貿易の範圍の擴張さるゝに從つて自然的にその中心的位置を占むるに至つて交換貿易の競爭場に參加することになつて急激に發展するものである。而も富の增加と共に科學・建築・交通・土木・工業・美術・文學等の發展に貢獻すると逆比例して農業資本の投下減少を來し、農村沒落の悲運に陷つて、國民生活は愈々向上すると共に貧民の增加を來し、優秀なる過去の民族性は腐敗に陷つて、唯人生は享樂のみを目的と見做すに至る。此の時機に有力なる競爭者の出現を見れば直ちに沒落の悲運に陷り、然らざれば內部の革命に依つて新生命を注入し發展を繼續し得るものである。農業時代、卽ち自給自足民族精神涵養時代の永きに比し、交換貿易發展期間は比較的短きを一般的

通則なりとす。

人類文化の向上進歩の爲めに、重大なる役目を負ふて居るところの交換貿易の文明に一國の全力を擧げて參加するときには、發展のあとに必然の沒落を免れぬと云ふことは、何と云ふ皮肉な歷史的現象であらう。それは交換文明そのものゝ罪ではなく、交換文明そのものが民族に自由を與へることによつて發展するものであつて、自由を制限することによつて又停止する。交換貿易の文明發展の爲めには、自由と云ふことは絕對的必要であつた。而も人間の道德的觀念は孔子の己の欲する處に從へども則を越へずと云ふ崇高なる域に達すること遠く、五慾の滿足を自由に獲得せんとすることによつて國民道德は頽敗する。而も交換貿易の文明は金萬能であるから、利益の多い交換貿易商品の生產に金が集中されて、比較的利益の少い農業の方面へ資本が投下されなくなることは免れない。從つて農業の荒廢するは自然の結果である。農業は自給自足を主とするものであつて、交換貿易の文明は個人主義を主とする。夫れであるから交換貿易の文明の進步發達に伴つて農業は衰へ個人主義となつて自由なる享樂主義に陷り、惡平等の觀念發達は當然であつて、マルクス主義の如きも交換文明萬能觀によつて、人類の全生產を商品と見做したる見地より派生せる一現象である。

また機械發明進步は交換文明の勢力範圍の擴張である。交換貿易の原動力は機械である。從つて機械の發明進步に多大の努力と犧牲とを拂つて居る。其の研究は旺盛であつて事物が著しく科學的

となり、生活樣式も思想も科學偏重となり、特に最近五百年科學の力によつて世界を制壓するに至り、科學に絕對の信賴を藏して居る。數學、物理など、基本科學、自然科學などは殆ど彼等の研究になるものにして、最近人間社會の事象まで社會科學として研究さるゝに至り、全く科學萬能の感がある。故に往々にして今尙幼稚なる社會科學に對してさへ、數學、物理の基本の科學と同一の正確さを認むる傾向を持つて居る。例へばルーテルの宗教改革以來、英國に發達せる自由、平等、博愛の社會科學的思想は彼の佛蘭西革命となり、アダム・スミスの自由貿易論は英國の產業革命となりマルクスの共產主義は露西亞の革命となつた如きである。而して其の結果はどふかと云ふに、佛蘭西革命が壓制の時代通弊を除去した點に於ては、人類社會に稗益する所あつた事は認めらるゝが、佛蘭西そのものは甚しき資本の分散となり、個性の壓迫となつて產業は振はず、人口增加は停止し二百年前歐洲第一の人口を有したる國が、今日に於ては減少の趨勢にあり、再び大なる發展の希望は期し得られない。次いで英國の產業革命は、交換貿易の飛躍的發展となり、西洋文明の世界制覇の原動力をなしたものであることは認むるが、農村荒廢の結果資本主義と不可分關係にある貧乏人は增加し、社會的救濟資金は二十億萬圓の巨額に上り、將來英國の恐るべき癌となつて居る。而して今日英國の農業を復興することは容易ならざることで、農業のない民族に永續性のない事は世界歷史に徵して明かである。且つ貿易の中心は其貿易範圍の擴張と共に移動することも亦歷史に明示

されて居る。今日の太平洋時代に於て英國はアダム・スミス以來、傳統の自由貿易主義を保護に改め、經濟ブロックに依つて孤壘を固守せんとして居るが、果して幾何の效果があるか。恐らく時が其の解釋を與へるであらう。而して共產主義の露西亞の革命に至つては何ものを得たか。ザーの專政の代りに總人口百分の一に過ぎざる百六十萬人の共產黨の專政を得たに過ぎない。この變革は露西亞民族にとつては殆ど何等の幸福を齎さず、國民は極端なる困苦缺乏に陷て、凶年には幾百千萬の生命を犧牲にする外はないのである。新經濟政策新々經濟政策と頻繁な政策變更のある每に、個人自由の尊重と資本の占有を漸次認め來つて、共產主義の理想は今日果して何處にありや。社會科學の實驗として千萬人以上の犧牲はあまりにも高價なものではないか。

科學が人類向上の原動力の一つであることには異論はない。科學は尊敬すべし。然り而して科學に對し、其の認識評價を誤つてはならぬ。數學と雖も人生に適用すれば一と一とを加へて二とならず、效力低減の法則に支配せらる。まして社會科學に至つては未だ幼稚であり、たゞに不變の眞理を具現しないのみでなく、僅かに或る時代に於ける或る民族の向上進步の一面を示すに過ぎず、其の適用を誤れば救ふ可からざる弊害を生ずる。天地は無窮永遠である。人類は、千差萬別である。將來人類は血液の混淆によるか。或は適者生存の理法によるかして、遂に世界人類は同一民族と化することが人類の希望であらねばならない。然し其の實現は前途遼遠である。今日世界の各人種は

其の天地の相異によつて適應性を異にし發達したるもので、世界交通開始後、五百年交換貿易の隆盛を來して僅か九十年にして、科學至高、交換貿易萬能は既に是正の時に直面して居る。天地自然の永久不變の生產たる農業を蔑視したる西洋文明は其の短所を暴露したのである。

西洋に於ける今日の交通交換文明は幾多の優秀なる民族、國家が必死の努力によつて先進國との競爭に打勝ち、やがて其の民族の力に應ずる發展階段に達せしめたるとき進步は停止し、しかも其の發展時期に於て農村を荒廢せしめ、自給力を失ひ、遂に沒落の悲運に陷る幾多の犧牲を供して建設せられたものである。卽ち西洋の交通、交換の文明には天に二日なき如く、競爭場裡には支配權を有する一國あるのみである。一國の興隆と他國の衰亡とは不離、不可分にして而も科學文明其のものは幾百千の國家民族の興亡を外にして、駸々乎として停止することなく連綿不斷の進步を續けて居る。西洋の交換文明に於ては科學の進步は絕對的必要である。科學を進步せしめ得ざる國家、民族は沒落の悲運に陷る外はないのである。西洋の交換貿易の文明は死の歷史である。若し此の交換文明に全生命をかけて奉仕するならば、發展のあとには必然の沒落があることは西洋史が明かに證明して居る。而も科學、交通交換の文明そのものは日に日に進步し、民族、國家を超越して世界人類共通に恩惠を垂れて居る。

兩文明と日本の相異

自給自足の文明に參加し、其の向上發展を助け、やがてその覇權を得ると共に惡自由、惡平等の享樂觀念を助長し、遂に交換文明の重大使命たる人類文化の向上に資する能力を失ひ、積極的生產方面にも消極的消費節約にも劣敗者となつて、人口增加を停止し、唯祖先の歷史的、資本的遺產の浪費者となつて人類文化向上の使命を擔當することを得ざるに至つて當然沒落の悲運に陷るのは已むを得ざる神の攝理である。人生は積極的に生活の向上と云ふことが大切であると共に、消極的に消費の節約、社會奉仕と云ふ道德的、宗教的人生觀がなければならない。交換貿易の文明は積極的に人生の慾望觀念を滿足せしめ、自給自足の文明は消極的に消費節約、家族主義、鄕土觀念によつて相互扶助の道德的、宗教的人生觀を發達せしむる。交換貿易の渦中に沒するに於ては永い自給自足の農業生活によつて養成されたる質實剛健の思想も、金を目的とする交換貿易の當然の弊害として慾望觀念のみ旺盛となり、人類生活の基本である天地の德を發揮する農業と云ふものが比較的利益の尠いのと、勞働の困難なることによつて自然衰微するのは蓋し當然である。故に西洋の歷史は終始交換貿易の發展と沒落過程を示したものである。將來の日本は此の交換貿易の弊を斥け、よく交

換文明の長所を攝收し、其の短所を捨て以て一君萬民の皇道精神の發展を計らねばならない。最近西洋文明の弊を指摘して復古思想旺盛なるを見る結果、往々皇道精神の發展性を無視するが如き說を見るは洵に遺憾である。皇道精神は、明治大帝の五箇條の御誓文の中に仰せられたる如く、天地の公道に基き智識を世界に求めて生々無息の發展性を持つて居るのである。どうしても積極的に交換文明の發達に資すると共に消極的に農村文化の向上を計つて、過去三千年の西洋歷史に見ることを得なかつた交換文明と自給自足の文明との調和を計つて、克く眞の文明を建設しなければならない。

既に述べた如く、交換文明と云ふものは個人の自由と云ふことを基礎として發展するものである。個人の自由なき處に交換文明の發展はない。スパルタの如き國家主義では如何に隆盛であつても個人の自由なく、從つて交換文明の發展なく文化の何等見るべきものが殘つて居ない。交換文明は個人的慾望滿足の自由と云ふことを基礎として居るものであつて、所有權の神聖と云ふことが認められて來て居る。然し所有權と云ふものは西洋の交換文明で認めて來た程神聖なものではない。早い所で稅法が絕へず變化して來たのを見ても明かである。なぜかと云ふに交換文明に於ける優勝者はその優秀なる民族全體の努力の結晶である。卽ち幾百年間の民族の惡戰苦鬪の結果を代表するものであつて個人の富と認む可きものではない。唯其の保管運轉を委任されて居るを認む可きであ

る。西洋の交換文明に於ては此の民族的、道德的宗教觀念の缺如の爲め所有權の神聖と個人の自制なき自由を認めたる爲めに、富の集中と共に國民的道德觀念の墮落を來して遂に沒落の悲運に陷るのである。宗教的全民族的精神なく、唯自己及び自己の周圍のみに捉らはれたる當然の結果である歷史上富なるものは國家を離れて考へられない。但しユダヤ人のみが國家を離れて富を所有して居るが、他の二十億萬人と云ふ世界人類は大なり小なり國家の庇護によつて富を所有して居る。故に富の用法に就ては民族的、國家的道德觀念を無視することは出來ない。

交通交換貿易の文明は金のみを目的として活動して居るのであつて、利益の尠い自給自足的農業を閑却する。從つて人口增加と云ふことに缺けて居る。卽ち今日世界を制壓せる歐米諸國の人口增加率が急激に減少しつゝあることは恰もギリシヤ、ローマの末期に髣髴たるものがある。交通交換貿易の利益は人口の增加によつて交換文明は發展するものであつて交換文明其のものゝみでは貿易の利益は擧がらない。自給自足の民族、國家を交換過程に導き入れることによつて利益を增加することは曾て支那や、日本の鎖國を開くことによつて急激に發展したのを見ても明かである。支那の門戶開放問題が盛んに唱導せらるゝのは四億萬人と云ふ大衆對手交換貿易の利を得んとするに外ならない。然し交換貿易文明はそれ自體の大缺陷として天地開發、特に一定地域より、多き農產物を生產すると云ふ自給自足の文明の長所を認めない。卽ち消費節約の美德を知らない。現に米國の如

き、日本人の生活を以てすれば四億萬人は充分生活することを得、全世界では二百二十億萬人卽ち現在世界人口の十倍を維持することを得るも、米國人の生活を以てしては二十三億萬人を維持するに過ぎないと云ふことである。卽ち日本の自給自足の文明の長所を學ぶにあらざれば、例令米國が支那を支配して交換貿易の利を占むるとしても、今日の米國の失業者全部を救濟することは至難である。大量生產の米國の產業で勞働者を消化し得る數は知れたものである。どうしても米國の天地を開發し集約農業によつて失業者を救濟する外はない。我國に對し八十年前交換貿易の利を敎へ開國せしめた米國に對し、吾人としては自給自足の文明の偉大なる價値あることを敎へねばならない。米國も西洋も、亞細亞より自給自足の文明の偉大なる價値あることを學ばねば沒落の悲運に陷る外はない。皇國日本は交換文明と自給自足の文明とを調和し、以て人類永遠不朽の眞文明を建設して世界を指導せねばならぬ立場にある。

日本の天地人

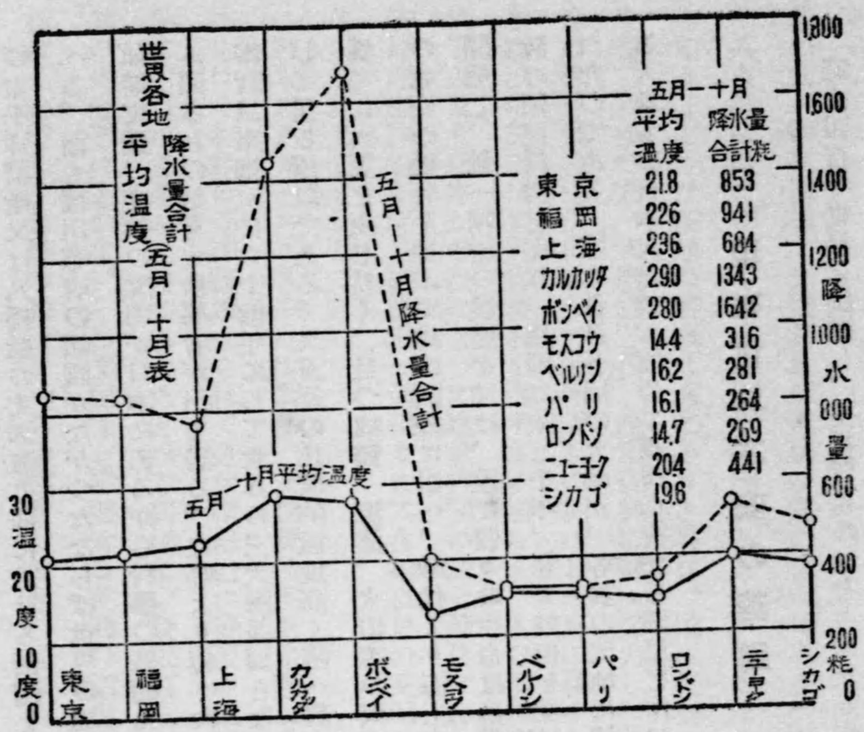
人類の歷史があつて八千年か、又は五千年か、東西兩方面に發達したる交通交換の文明と、自給自足の二大文明は五百年前より相接觸するに至つた。當時歐洲は五千萬人に過ぎざるに、支那と印度とは三億萬人を超えて居たと推定せらる。世界は帆船と小銃といふ交換文明の利器に絕對的に壓

迫せられ、南北アメリカでは二千萬人以上の血は流され、印度を征服し、支那を經て東西に向つて出發せる交換文明は最後の到達點なる日本に於て再び相會した。

皇紀二、二九九年以來二百二十年鎖國をとり、桃源の夢を貪りたる日本を二、五一四年遂に開國せしむるに至つた。西洋人が世界征服に出帆して以來、四百年各種の異人種を發見征服し殆ど世界を掌覇して餘すところなかつたが、其の最後に死を見ること鴻毛の如き、忠君愛國の精神的文明を有する特殊の國民日本人を發見して行詰つたのである。如斯精神的文明は、泰西文明に於てはもとより支那及印度の文明にも發見することを得ざる大和民族特有の文明である。然らば其の文明の發達の原因は何であるか。

日本の天地に對し、國土狹小、瘠土であるといふ悲觀說をよく耳にするが、吾人は全然これに反對である。

皇國日本は天孫降臨の聖勅は申すも畏く、農は國の基にして全國を通じて夏季の溫度は高く、降水量は多く特に梅雨と云ふ特種なる季節雨の爲め米の生產に最も適して居る。而も神代より海上交通は開け、機械の文明もあつて水車の應用などで多收穫の農法では世界第一である。從つて日本の一反當り米產額は世界第一であつて、五百年前既に歐洲の三分の一の千八百萬人と云ふ大人口を二百年前には約三千萬人と云ふ人口を養ひ得た。如斯偉大な自給自足の文明を發展せしめた國は未だ



何處にもない。此の文明發展の爲めには日本全國至る處に水害防止の堤防の爲め人柱の犧牲が幾千萬とある。皇國日本は天地の德を發展せしむる爲めに命をかけて居ると云ふてよい。如斯き歷史が世界のどこにあるか。今後と雖も耕地の擴張は勿論、多收穫農法は研究せられ反當十石取りさへ叫ばれて居る。世界のどこにかゝる研究があるか、自給自足に於ては世界一である。世界交通、交換の文明に至つても神代に於て或る學者は出雲、筑紫、南鮮を包有したる海原國があつたと唱へ、神武天皇の東征、神后皇后の三韓征服、近くは三百四十年前小笠原島の占領、三百二十年前伊達政宗建造の日本船

の太平洋横斷又は八幡船の支那海方面に於ける活躍を見ても、海は日本の生命線の一つであると云へる。而も德川幕府の鎖國がなかつたならば世界の地圖は確に現狀とは相異して居ること疑ひない如斯交通、交換の文明が日本にあるから科學の基礎たる數學は發達して居る。ニュートンと光を爭ふ關孝和の如き大數學者が出て居る。支那より傳へたる漢字も假名を發明して科學的にした。明治維新以來僅かに六十餘年にして世界の三大海運國となり、其の漁業は世界海面の半ばに亙つて發展して居る所以である。又夏季の比較的濕度高く堪へ難き暑熱と鬪ふ爲め、開放的木造建築を創作し爲めに火災を生じ易く、且つ地震、海嘯、火山等の天變地異に對する三千年の惡戰苦鬪に、幾千萬の生命の犧牲を拂ふて神の試練に耐へ、神代より海上交通を行ひ、交通の價値を認め、國內交通を開發し、統一精神の發達を助け、遂に個々の生命は皇道日本の全生命の一部分であると云ふ共同一致の國民精神を作り、建國以來三千年、嘗て外侮を受けざる萬國無比の國體的精華を發揮するに至つたのである。卽ち世界各國の天地が、各其の天地に適應する民族性を作つた如く、日本の秀麗なる天地も亦日本人と云ふ極めて優秀卓拔なる國民を作つたことに不思議はないのである。

現在世界不安の基因

過去四百年世界を制壓し、交換貿易の利を占めたる歐洲は急激なる膨脹をなし、二百年前僅に二

億萬に過ぎなかつた人口は現在四億八千萬に上り、其の增加率は世界大戰前には千分の十を越えて居つた。機械產業、交換貿易は人類の眞の文明であり、之を作りたる白人は神の選民であり、世界の異人種は是に奉仕するを當然の義務なりとさへ彼等は思考して居つた。此の交換貿易萬能感によつてカイゼルは獨逸の將來は海にありと叫び、遂に英獨の爭覇戰たる世界大戰を惹起し、自ら墓穴を掘るに至つた。大戰終了後、產業復興に營々努力し、其の生產を開始するや、世界既に一變し日米の世界貿易進出によつて歐洲貿易の利は日に日に減少し、自給自足の手段を講ずるも天惠に乏しき歐洲に於ては到底農產額を激增する道なく、人口增加率は大戰前の二分の一に過ぎざる千分の五以下となり何等かの途によつて現狀打開の法を發見せんとするのが歐洲の惱みである。而も此の不安は過去四百年間交換文明一面張りにて自給自足の文明を顧みざりし歐洲人の容易に脫出し得ざるものではあるまいか。

卽ちアダム・スミスの自由貿易、交換貿易至上主義より、佛蘭西大革命を經て中世紀暗黑時代のあらゆる桎梏は全部撤廢せられて近世歐羅巴は發展の機運に向ひ、嘗てギリシヤ、ローマの盛時に於て、自由思想の旺盛であつたと殆ど同樣に、最近百五十年間は世界の政治、經濟、思想は自由主義の支配下にあつて、その支配權を掌握せる英國の議會中心主義の思想は世界を風靡し、各國の政治はその歷史と傳統の相違に拘らず輕重、厚薄の差はあつたが英國を模倣した議會中心主義の傾向

を多分に含んで居つたのである。此の自由主義の反動としてマルクス主義の如き極端なる平等の假面を被つた自由壓迫の思想が發生するに至つて遂に露西亞の共產主義革命となつたのであるが、前記せる如く今日露西亞の現狀は、その理想と相距ること遠くマルクス主義の實現不可能なのを如實に物語つて居るのである。

自由貿易主義は汽車、汽船、機械生產の發達と共に金銀、石炭、石油、鐵、原成林等天然資源の開發は隆盛を極め、前代未聞の交換貿易の發展を遂げ、競爭は愈々激甚を極め、彼の世界大戰となつたのである。

二千五百三十年普佛戰爭に於て、賠償金として二十億萬圓を課したるに佛國は僅かに一年半の間に內國債によつて完全に辨償したるに鑑み、世界大戰の戰敗者たる獨逸に對しては千三百億萬圓と云ふ賠償金を課し、列國はこの賠償金を目當てにその復興事業を遂行したのである。然しその產業機關復興の後には歐洲の交換貿易は漸次減少し、賠償金を十三億萬圓に減ずるに至つても今日獨逸は支拂停止の已むなきに至つて居る。自由貿易主義の守護神たる英國は二、五九一年オツタワー會議によつて傳統の自由貿易主義を保護貿易主義に轉換し、各國は關稅の障壁を高くし至る處に自由主義の晩鐘を聞くに至り、その反動としてムツソリニーのファショ運動、ヒツトラのナチス運動或は米國のN、R、Aなどの運動の如く今や全世界は自由の束縛、交換貿易の制限、自給自足に割據せ

んとする傾向が顯著である。これ一つに歐米の世界制壓指導權の動搖である。大西洋より太平洋への世界中心の移動を暗示するものである。歐米の世界覇權の守護神たる汽車、汽船、紡績その他現在の主要生產、交通機關の進步は停止して、羅馬末期に於て東力の西漸したる如く皇國日本の進步の時代を來して居る。

人類は向上の一路を進んで居る。向上なき民族、國家は滅亡すべきのみである。人類の向上は「よりよき品」を「より安く」供給することである。此の人類文化を向上せしむる偉大なる力を持つて居る日本品の世界的進出は關稅の障壁や、輸入制限など如何なる手段を以てしても之を絕對的に防遏し得るものではない。今日の世界不安は交換貿易萬能の西洋文化の行詰りと、皇國日本の新文化建設への擡頭である。

あたかも春秋二季に氣壓配置の變化より惹起する暴風雨の襲來の如きものであつて必然的でありし回避出來ないものである。一路平安の好天氣では氣壓配置の變更は不可能なる如く、世界不安なくして新文化は建設されるものではない。

歐米の力によつては、今後の人類文化の進步は期待されない。こゝに兩文明を中和、消化せる皇國日本のみが、その指揮權を握るものである。而して今後の人類文化にその建設すべき文化は何んであるか。西洋文化の模倣の交換文明ではなく、東洋の孤立割據の自給自足文化でなく、交換貿易

によつて人類文化の向上に資すると共に自給自足の文化によつて世界の天地を開拓し、生々無息の人口增加を計るべきである。即ち交換文明と、自給自足文明の調和を計つて、眞、善、美、物心一如の永久不變の人類文化を建設せねばならぬ。

世界中心の移動

地方的にせよ國家的にせよ、或は世界的に見ても、その中心は絶えず移動して已まない。その原因は人類向上進歩に基くものである。即ち、交通機關の發達、天地開發の結果による自然的人口增加の結果である。埃及、チグリス、ユーフラテス河沿岸、印度、支那に發達せる孤立自給自足文明は交通機關の發達によつて、中央亞細亞、埃及、地中海東部沿岸を包括する交換文明に轉じ、玆に於て其の中心に位し、且優秀なる素質を有せるフエニキヤ人はその貿易を支配してシドン市チレー市などの世界中心都市を作るに至つたのである。

又、地中海がジブラルタル海峽によつてのみ大洋に交通し得る爲め、その中心はギリシヤよりローマに移り古代文化を形成した。之れは主として交通機關としてガレー船と馬とを主用したものである。更に之が中世紀の暗黑時代の裡にノルマン人は縱帆を發明し、その發達と共に北海地中海の貿易を制壓するハンザ同盟都市の發展となり、遂にコロンヴスのアメリカ發見となつて世界中心は

西葡兩國に移り、次で和蘭、佛蘭西を經て大西洋の樞軸たる英國に移つたのである。

然るに皇紀二五三〇年代に發明されたる三段膨脹機關は海上交通の長足の進歩となり百年前千噸級のものより三十年前には三萬噸となり、今日は七萬噸の商船を見るに至り、世界の中心は今やその最後の到達地に移動せんとしつゝある。

翻つて皇國日本の現狀とその地位を見るならば、明治維新以來僅かに六十五年、玆に從來の追隨外交を精算し、皇國日本の

列國人口表（萬人）

皇紀年	日	英	佛	獨	米	露	支	歐
700	—	—	—	—	—	—	5,000	—
1,300	500	—	—	—	—	—	—	—
1,800	1,000	200	—	—	—	—	10,000	2,500
2,000	—	400	—	—	—	—	—	5,000
2,200	2,000	—	—	—	—	—	20,000	9,000
2,360	2,900	550	2,000	—	—	1,100	—	13,000
2,410	—	650	—	—	—	1,700	—	—
2,460	2,800	890	2,730	—	530	3,800	30,000	17,500
2,480	—	1,200	3,050	2,500	960	4,800	—	—
2,500	3,000	1,570	3,420	—	1'700	6,300	—	—
2,520	—	1,990	3,740	—	3,150	7,500	—	28,900
2,540	3,600	2,570	3,750	3,890	5,000	—	—	—
2,560	4,400	3,220	3,850	5,000	7,600	11,200	45,000	40,000
2,570	5,100	3,520	3,950	5,860	9,200	13,200	—	—
2,580	5,790	3,740	3,920	6,150	10,570	14,400	—	—
2,590	6,450	3,975	4,140	6,430	12,300	15,700	44,000	48,500

英はインゲランド、ウエルス。

皇道主義を以て獨力東洋の平和を保持し、信義を世界に布き、人類の福祉を增進せんとするに至りたる偉大なる國力を涵養し得たるは、君民一體三千年の光輝ある歷史の絕對的威力によること勿論なるも、我國の世界的位置が今日の海の文化時代の恩惠に浴することも亦多大なるが其の主要なる原因なりと認む。

現代產業の中心地として、日本、歐洲諸國、米國の三つの中心地を現代の世界的交通機關たる汽船航路の距離の點より觀察するに、東京とロンドンとの等距離の地は印度のカラチで約一萬二千粁である。之れを境界として近距離內の人口を概觀するに日本は亞細亞、南洋、大洋洲等十億萬人、歐洲諸國は歐羅巴、亞弗利加七億五千萬人、米國は南北亞米利加二億五千萬人を各其の近距離內に包有して居る。卽ち日本は產業上世界の中心に位し極めて優越なる地步を占め、米國は最も不利の位置にあること明にして、モンロー主義を捨て、機會均等、門戶開放主義を主張する外なき狀況にありと云ふべし。如斯優秀なる位置を占むる結果、世界の汽船は日本及東方亞細亞に集中して居る今日日本の所有船舶は英國の五分の一米國の三分の一の四百萬噸に過ぎず、外國貿易も略兩國の四分の一に過ぎざるも一ヶ年間の出入船舶噸數は英國の一億三千萬噸、米國の一億二千萬噸に對し我國は一億一千萬噸にして略伯仲の間にあり、獨逸の六千萬噸、伊太利の四千萬噸に比し著しく優つて居る。之れ一に現代の海の文化時代に於て、日本が極めて優秀なる位置を占有せる結果に外なら

ず、翻つて國際汽船航路に對する列國の地形の優劣はどうか。

英國の地形は圓に近く國際汽船航路としてはロンドンのみであつて、リバプールは北西に偏し世界汽船航路に面して居らない。

米國も大陸によつて大西洋、太平洋を遮斷し世界汽船航路はニューヨーク及桑港の獨立關係の二港に過ぎず。

日本は橫濱より長崎迄一、四〇〇粁と云ふ長い沿岸が國際汽船航路に面して居る。如斯長い沿岸を現代海の文化時代の國際幹線航路に沿ふて保有して居る國は外にない。

各國の外國貿易の狀況を見るに英國はロンドン、米國はニューヨーク、獨逸はハンブルグの一港で其の總額の大約二分の一の貿易を行つて居る。之れは各國地形の不利なる爲め國際航路の汽船が之等諸港以外に多く出入せざることを如實に示すものである。然るに我國の外國貿易は橫濱より長崎迄の沿岸各港に配分され一港に集中されて居らない。之れは國際航路汽船が此の沿岸各港に出入する結果にして、世界に類例なき優秀なる地形を供へて居る賜物である。

如斯海の文化時代に我國は世界の中心に位し、而も極めて優秀なる地形を備へ、海國として世界第一の地步を占有して居る。從つて德川幕府の鎖國政策の爲めに植民地獲得には落伍したが、明治維新以來此の沿岸に幾多の大都市や、現代產業は發達し、國富の增加は極めて急激であつた。東北

地方並九州東南部の產業開發が著しく遲れて居るのは、犬吠岬以北の地形が眞北に偏し、九州東南部が眞南に偏し、何れも國際汽船航路の圈外に位置するからである。國際汽船航路に當ればコロムボ、香港の如き一孤島でさへ、人工を以てしても大貿易港となるのである。

地理的に地形的に海の文化に惠まれたる日本に對し、海は日本の門戸であり、食道である。海なくして日本の現在、將來の發展は期待され得ないと云ふても過言でない。

日本の不安

斯の如く、世界人類の歷史とその文明を檢討した結果、得たるものは、皇國の重大にして光輝ある使命であるが、またその大使命をになふ日本の不安も盡きせぬものがある。世界を掌覇せんとすれば、その飛躍が大なれば大なる程、內を顧みて不安の增大する事を感じない譯にはゆかない。

今や、日本は交換貿易場裡の中心に位し、其の富の增加は急激であり、今後益々富の增加の可能性を持つて居る。從つて富の集中は急激にして農村は日に日に疲弊しつゝある。卽ち五千年以來、東西兩方面に發達したる自給自足の文明と、交換貿易の文明とは日本に於て最後の衝突をなし、卽今日本の惱みは新來の交換貿易文明の稍や橫暴なるにある。一部の人は金萬能の交換文明に墮落して居る。故に之を如何に調整して三千年の歷史に合致せしめんとするかにある。而して交換文明の

弊を痛擊して發達せる共產主義的思想が形をかへて各種の方面に動きつゝあるを見る。大革命を行つた佛蘭西や、產業革命を行つた英國は革命の價値をよく認識して居る。彼等は革命に對する免疫者である。共產主義は彼等に何等の關心も與へて居らない。大化の改新や、明治維新の歷史を有する日本には維新の效果を禮讚する思想がある。然し大化の改新も明治の維新も家族制度たる皇國日本の基本に合致したるものである。今日の思想的暗流は極端なる平等感であり、共產的であると考へらるゝ。之は家族制度の破壞であり、皇國日本の國本に合致するものではない。平等主義も個人主義も兩端である。兩極は眞理ではない。君子の道は中庸である。交換文明と自給自足の文明の調和を計るは君子の道たる中庸でなければならぬ。今日直に此の方法こそ之を調和する道であると主張するものがあるとすれば夫れは正に誤謬である。これが調和するは時であり、國民の努力である共產主義的惡平等の暗流は斷乎として排擊せよ。個人萬能の資本主義には速かに調節を加へよ。農村の負擔を輕減せよ。然し假に日本國內に於ける資本主義の恩惠に依て農村を救濟することを得るも、自給自足の根本を失ふに於ては、農村は資本主義の寄生虫として生きるのみであつて、世界的見地に立つて存在の價値を失ひ勢ひ沒落の悲運に陷らざるを得ない。農村は自給自足を根本方針として自力更生を計り、以て世界的見地より農村として獨自の地步を占めざるべからず。

集中せざる資本の價値少なきは佛蘭西を見て明かである。

資本集中に努力する資本家の努力は、軍人が戰場に於て勝利の榮冠を得んと決死の覺悟で臨むのと殆ど同樣の覺悟であらう。其の意氣は壯とし、世界の富を日本に集中したる努力に對しては感謝する。然し集中したる富の用法に就ては大いに制限がある。恰も個々の生命は皇國日本の全生命の部分である。故によく全生命の爲めに爆彈三勇士となつて全生命に奉仕すると同樣に、個々の富は日本の國富の部分である。時に應じて自覺ある犧牲を供すべきである。富の使用は皇國日本の國民として自制ある正義に立脚せる自由の下に行はれなければならぬ。現在の資本家中、往々個人の自由意志を曲解し何等の制限なく、社會風敎上、看過し難き方面に濫用するものがある。如斯は遂に自ら墓穴を掘るもので、遂には資本の國家統制を計る外なきに至らん。

航空機の絶對價値

かくして今日、西洋人が如何に産業の合理化を計り、從來の交通機關の運用に努めるとしても、こゝに、産業上根本的機械機構の進歩を見るに非ざれば、西洋文明交通機關を驅使し始めたる東洋との競爭は極めて困難であり、かゝる推移を以てすれば、當然、東力西漸の時代をこゝに再び現出するに至ることは疑へぬ事實である。

然るに、この趨勢を阻止するために、西洋が新たに著眼しその威力を運用せんとして努力しつゝ

あるものに、航空機がある。航空機こそは、當に人類最後の文化を作るべき使命を有するものと見做し得べく、西洋は之によつて東力西漸時代の擡頭を抑制し得る。即ち航空機によつて、經濟的に將又軍事的に、我が日本の進出を阻止しなければならないと考へてゐるかに見へる。

故に航空機に對する期待は、西洋人にとつては、實に絶大そのものである。今日、我が日本に於ても、航空問題は漸く熾んに論ぜられるに至つたが、歐米諸國と較ぶれば甚だしき懸隔を認めざるを得ない。日本人にして航空に關心を有する者、果して幾何の數に上るか。また東洋人全體として、これを見る時、果してその何パーセントが、航空について關心を有してゐるか。端的に述ぶるならば、東洋人の間には航空問題こそ、夫々、國家の重要問題たるにも拘はらず、國民は何れも我關せずの態度にあると斷言して憚らない。

然るに、西洋人の間に於ては、國家が多大なる關心を有してゐることは元より當然なるも、更に國民も、亦擧つて無上の關心を有し、貴族富豪は進んで民間航空の發展に對して努力してゐる。これ或は、歐洲大戰當時に受けたる慘害の經驗による所あらんも、一方には又、機械の價値に絶對の信頼を有する彼等白人として蓋し當然であらう。

尙又、東西人種の航空機に對する期待、特に之が軍事上に及ぼす評價には非常なる相違がある。西洋人は、將來戰に於て十萬臺、二十萬臺の飛行機が、戰線に、或は、戰線外遠く內地に活躍するこ

とを豫想し、且つ之に對する諸般の準備に怠りない。

事實經濟上に於ける航空機の價値は、勿論重大であるが、尠くも經濟問題に關する以上、直ちに國家の運命を決するものではあり得ない。然るに軍事上に於ける航空機の價値こそは、實に絶對そのものである。軍事航空は、將に將來戰に於ける勝敗の決を握る鍵であり、今や軍事航空に於て西洋に一日の後れをとらんか、東洋の危機は期せずして到ること論を俟つまでもないのである。

かゝる航空機の絶對價値を充分に認識すると共に、卽刻、之が十全なる對策を講ずることは、蓋し現下の急務であると信ずるものである。

航空整備の對策

凡そ航空の整備に就ては、之を單に軍備の一部門として軍部關係の手にのみ放任し置くほど危險至極にも亦、淺墓なることはない。若し國民にして一度び航空の本質を通觀すれば、如何に航空整備が平時から軍部以外、全國民の深甚なる關心と徹底的協力を必要とするかゞ判明するであらう。

假に米國の現狀に眼を轉じてみても、航空兵將士以外、實に學生飛行士約九萬人、民間飛行士約四萬人を數へ、英國も亦八千人以上の民間飛行士を保有し、かくして補助空軍豫備空軍を整備し、

或は戰時一箇年間に六千人からの飛行士を急速養成補充し得る如き對策を講じてゐる。實に、志願兵制度の英、米でさへ、かくの如く民間航空の動員による大空軍の編制に熱中してゐるのである。

然るに我國の現狀は如何と觀るに、民間飛行士は零に近き狀態を示し、果して一旦緩急の曉に、他に劣らざる優勢なる航空兵力を繰出し得るであらうか。卽ち論を俟つまでもない。戰時飛行機の大量生産は、假りに可能なりとするも、之を活用すべき飛行士の急速養成は如何といへば、今日に於ける貧弱なる現狀の打破に俟たざれば、その結果は餘りにも明瞭であらう。

飛行士に次で、飛行場問題及び戰時各種の勤務に從事すべき輕飛行機の問題も亦、一刻と雖も忽せになし得べきではない。戰時飛行士の急速養成の爲に、直ちに數千百臺の輕飛行機と、數十百箇所の飛行場を必要とすることは論ずるまでもない。之に對する準備對策は如何。我が國産輕飛行機と稱するものは、現に何臺を所有するや。完全なる民間飛行場は幾何を數へ得るか。誠に現下皇國日本に於ける之等國家總動員的大空軍の編制に關する限り全く零と斷じてよい。

國民の國防、國家總動員の國防は皇國日本建國の精神であり、明治天皇の詔勅に炳乎として明かである。然るに空軍に於てのみ以上の如き國體に反する現役主義を採るは何故か。

畢竟來るべき非常時に對する應急工策に急なるが爲めであらう。然りと雖も國防は當面の準備と

共に國家百年の大計を怠つてはならぬ。即ち國家總動員の大空軍の準備は現下緊急課題の一つであると確信して憚らぬ。この見地よりして、須らく軍事豫算の一〇%乃至二〇%に相當する國費を以て、空軍第二線たる民間航空の充實發展に努め、國民の國防、國家總動員の國土防空を計るべきである。

米國の航空第一主義

米國は汽船時代に世界汽船勢力の過半を保有し、海上王として世界の四分の一を占領せる英國の横暴を制する爲め、華府海軍會議に於て英、米均等の海軍力を有し、更にロンドン會議に於ては一萬噸巡洋艦級に於て英國の十五隻に對し十八隻の優勢を認めしめ、海戰の赫々たる勝利なくして平和の外交場裡に於て世界第一の海上兵力整備の權力を獲得した。而も來るべき世界の變局は、新兵器たる航空勢力の消長にありとなし、一にも航空萬能、二にも航空第一主義を堅持して著々準備を進めてゐることに不審はないのである。

共產主義の露西亞も島帝國の日本の死命を制するには航空機以外になしとし、航空萬能主義を唱へて其の整備に邁進して居る。露國の民間航空を指導する機關、飛行協會（**オリアビアヒム**）は既に七百萬の會員と、千六百萬圓の寄附金を以て國家總動員の空軍整備に邁進して居る。

世界大戰開始の際英、佛、獨三國の航空機は僅かに五百機に過ぎなかつたが大戰中に十六萬臺以上を製作し、休戰時には五萬餘を數ふるに至つた。即ち百倍に增加したのである。而も當時の飛行機は現在とは比較にならぬ微力であつたに拘らず、やむにやまれぬ必要上如斯增加した。來るべき第二の世界大戰に果して飛行機は如何なる任務を分擔するか。過去の如く陸海軍の補助兵科たるに止まらず、獨立の兵科として絕大なる威力を發揮することに何の疑問もない。之が今日航空問題の重大なる所以である。然らば現在の六大國の軍用機は幾何か、實は僅か一萬臺にして大戰末期の英獨佛三國の保有量の五分の一に過ぎない。如斯少數では彈丸の如く消費する航空機としては決して大なる勢力を認むるを得ないと云ふかも知れぬが、吾人の慮る所は航空機の進步の急激なると、大量生產能力の增加である。次の世界大戰に邁遇するとせば現用一萬臺の飛行機は直に十倍、二十倍となり時速四百粁五百粁の飛行機は空を焦して亂舞するであらう。而して空中に於て一擧に戰の運命を決するであらう。現に英國空軍中佐前代議士**サー・チャルス・デニストン・バアネツト**氏の如きは英國空軍の千五百機は明日戰の要求の五**パーセント**を充たし二週間を維持するに過ぎないと論じ、民間航空の必要を絕叫して居る。航空國策は空軍の第二線たる民間航空の充實である。

我が國防

國家總動員の現出

昔、武士とか、傭兵とか特種の小數國民によつて國防を計つて居た時に、ナポンオンは佛蘭西を救ふものは佛蘭西人の外にないと呼びかけ、今日の國家總動員の先鞭をつけ、一朝にして歐洲第一の陸軍を作つて、大帝國を建設したのは世界歴史上劃期的事實である。之を學んで普魯西は徴兵制度を布いた。これ又世界に冠たる陸軍を誇るに至り、列强みなこれに倣つた今日は徴兵制度と志願兵制度とに拘はらず、列强の國家總動員の國防となつたのである。而も此の國家總動員の國防も時と場所とによつて益々深刻を極めつゝある。日露戰爭では日本は百八萬人露西亞は百三十六萬人を動員したに過ぎないが、歐洲大戰中では獨逸は九百六十九萬人、墺國は五百九十萬人、露西亞は千二百萬人、英國は五百五十萬人、佛國は四百六十六萬人、伊國は三百二十萬人、總計實に三千五百四十萬人と云ふ未曾有の動員で、眞に文字通りの國家總動員を現出した。

日露戰爭では兩軍の總發射彈數は二百五十萬發であつたが、歐洲大戰では佛國は三億四千萬發、

英國は三億萬發、獨逸は五億八千萬發と云ふ莫大の數に上つて國家の全資源を擧げて軍需品の製作に從事せしめて尙足らなかつたのである。

國民的思想訓練の緊要

かやうに世界大戰では人口の六分の一を動員したり、又十數億萬發の砲彈を製作せねばならぬことによつて明かなる如く、陸軍は眞に國家の全資源を擧げて一丸とせる國防である。速戰速決は戰の上の上乘なるものであつて、元より欲する所であるから、其の準備は最も緊要である。然しながら持久戰は歐洲特種關係の發生であつて極東に位置する我國としては其の要なしとするならば大なる錯誤を起すことがありはしないか。科學の進歩は地球の距離を日々短縮してゐる。須らく持久戰に對しても亦克く耐ゆる各種資源の涵養が極めて必要である。獨逸が世界大戰に敗退を來した所以は必ずしも空中を制壓せる空軍の爲めでなく、タンク其の他の新兵器でもなく、米國の參戰によつて全般的資源の均衡の破壞を來し、米國軍二百萬の參加により戰場兵力が著しく異るに至り、一方ウイルソンの唱へたるカイゼル責任說の宣傳によつて國家の基礎たる君民一致を破壞した軍規の頹廢の結果である。陸軍の國防に對する基礎は、地形から武器に、小數の特種の國民から多數の國民に移つて、遂に國家總動員の國防となつたのである。國民思想の統一は實に陸軍の根幹ではあるま

いか。即ち學校教練、青年訓練、防護團の編制等、國民全部の協同の國防であるといふ思想的訓練が緊要である。

海軍と陸軍の特色

海軍の戰鬪は自づから陸戰と稍趣きを異にするものがある。第一は軍艦其の物の製造に比較的長年月を要すること、第二は海上生活といふ不自然な生活を克服して戰鬪能力を發揮すべき特種の訓練を必要とする事である。古今の英雄ナポンオンは大陸軍を作つて歐洲を席捲すると共に、數では英國を凌ぐ大海軍を編制することを得たが、ネルソンの爲に其大艦隊は遂にトラハルガーに破られ蓋世の英雄も空しくセントヘレナの土となつたのは、海戰の勝敗が啻に數のみによらず其の實質に俟つもの多大なることを明瞭に證左したものであつて、日清役の黃海々戰に參加した我常備艦隊の將士は僅かに約四千人、又日本海々戰に參加した我聯合艦隊將士は約二萬二千人、世界大戰のジェツトランド海戰の際英國側は約六萬人獨逸側は四萬六千人である。かく觀じ來れば將來皇國日本の運命を決する大海戰に遭遇するとしても、參戰將士は漸く五萬人を多く超ゆることなく、如何に海軍の整備が陸軍と異なつて居るかが判斷されるのである。要するに海戰は一種の國民選手競爭のやうなもので、國家總動員と云ふ點では、陸軍のやうに國家の全資源を理想的に利用する能はざる所

以である。然し海軍の全能力を發揮せしむる爲には商船は絕對的必要であり商船なき國に海軍の發達は到底期待されない事は歷史によつて明瞭である。特に近年華府竝ロンドン海軍軍縮會議の結果軍艦噸數其の他幾多の制限と共に商船の價値は一層增加した。特に優秀商船は假裝巡洋艦假裝航空母艦として著しく其の價値を增大し來つて、將來は此の商船を無視して一國の海防勢力を親知することは出來ないやうになるのではあるまいか。特に我國の如く國家必要の各種資源を海外に仰ぐ國にあつて西太平洋では日本沿岸を去る一千粁範圍內の制海權維持は國家の存立上絕對的必要である若し萬一之れを犯さるゝに於ては各都市は直に爆擊を蒙り、必要資源の輸入は危險に瀕し國家の安危に關する重大事である。此國家生命線を侵すものに對しては何ものたるを問はず直に迎擊すべきであつて、持久戰法は寸刻も許さるべきでない。從つて開戰直後一擧に此の西部太平洋で龍虎搏擊の大海戰を演じて、國家の運命を賭するの途が最も至當なのではなからうか。好むと好まざるとに拘らず、これこそ眞に速戰速決であるから海軍の常に滿を持したる整備を必要とするのであつて、持久恢復を計るやうな戰法は國家の存立上絕對に出來ない。とにかくその整備には多額の經費を要し、財政上極めて重大なる負擔となるが、世界中心に位して人類の福祉增進に對し重大使命を負ふ皇國としては又おのづから已むを得ないのである。

空軍整備の急務

然るに玆に航空機の顯著なる發達によつて海陸兩權力の勢力均衡に俄然重大なる變化を起した。これまで海陸兩權力は各々獨立の地歩を占めて居つた。即ち各々其の權力の及ぶ範圍は海岸基線から砲熕の射程であつて僅に三十粁に過ぎなかつたのである。此の三十粁の射程外では海陸兩權力はお互に絶對無力且沒交渉である。國際公法に於て一國の領海を三海里（約五粁）と規定せるは過去の砲熕の發達せざる時代の射程を基礎となしたるものである。而も世界表面の十分の七を占むる海の交通を制する海上權力は絶大なる力をもつてゐる。過去約五百年に亙つて海上權優越時代をなしたのであるが、近時航空機の發達によつて陸上勢力が著しく增加したことは周知の事實である。即ち航空機の行動半徑内にある海上艦船は其の襲擊を免るゝことはできない。飛行艇の行動半徑は今日既に二千粁に及び陸上機と雖も千五百粁にまで達して居る。即ち陸上の勢力範圍は彈丸の射程三十粁より、飛行機の行動半徑千五百粁に、いはゞ五十倍の增加を來したるに等しきものと認むべきである。然るに航空母艦の搭載飛行機は漸く五百粁に過ぎない。又飛行艇も獨立して遠く大洋を横斷して行動することは殆んど不可能の狀態にある。故に今日幼稚な航空機の能力をもつて見ても、皇國日本の國防は正に一大變革をなさねばならぬ。

如斯航空機の發達によつて、千島から臺灣に至る四千粁の列島に沿ふ東方二千粁以上の海上は、此の列島内にある航空兵力の行動半徑内にある。從つて此の廣範圍の海上で國家の運命を決する彼我の大艦隊が交戰する場合には我艦隊航空隊は國土内の航空兵力の支援を期待し得るが、英、米其の他如何なる國の艦隊と雖も其の本國航空兵力の支援を期待することは全く出來ないのである。それであるから我國に强大なる航空兵力を整備した曉は、我領土は南北四千粁に亙る點々たる島嶼ではなく南北四千粁、東方二千粁即ち八百萬平方粁の海上に擴張したと同樣である。日本海、黃海、支那海は勿論我國の庭池のやうなものである。若し夫れ委任統治地である南洋群島の價値に至つては絶大である。何故か。東西四千粁、南北二千粁の廣範圍に散在する此等の島嶼は多く珊瑚礁であつて丸形でなく、殆ど灣形をなして居る故、丸形の島では、潛水艇或は飛行艇は風波を避けて待機することは出來ないが、灣形を成せる之等の島々は絶好な泊地をなして居るから、潛水艇、飛行艇の根據地として絶大な價値がある。我沿岸航空兵力の增加によつて幾十隻の航空母艦にも優るもので優に南部太平洋を制壓することが出來るのである。如斯北は千島から南は南洋委任統治區域に至つて太平洋の西部一帶は航空機の發達によつて我國陸上權の勢力範圍となつたと云ふことが出來る。此の範圍内では我が海上權に對する他の海上權は常に我國内航空兵力を考慮に入れざるを得ないのであつて、かやうな有利な地勢を占めた國は世界中、外にはない。實に皇國日本の世界に秀で

る獨特の點である。

しかしながら我國は東に太平洋八千粁を距てゝ米國に對すると共に西に日本海、黃海、支那海八百粁を距てゝ亞細亞大陸に相對して居る。若し此の亞細亞大陸が優勢なる空軍國によつて占領せられたとしたら例へ我が精鋭なる聯合艦隊が海上を絕對に制壓し得たとするも敵航空機の襲擊に對し帝國內地の各都市を防禦することは殆ど不可能と云ふて過言でない。今日陸上機優に千五百粁の行動半徑をもつてゐる。從つて八百粁の日本海、黃海を一と飛びに超えて大陸から一擧に內地各都市を空襲することは容易な業である。殊に之に對し各都市が如何に必死の防空施設の完備に努力を拂つたとても敵飛行機の空襲を免るゝことは殆ど出來ないのである。例へば千九百十八年三月末に於てロンドンの防空設備は飛行機二八二臺、高射砲二六六門、探照燈三五三基を有して居つた位で三箇年間の空襲の慘憺たる經驗により殆ど最善の防禦施設を完備したにかゝはらず同年五月十九日の獨機三十三機の襲擊によつて死者四十九名傷者百七十七名の慘害を蒙つてゐる。かやうに敵の空襲に對し都市防空施設のいかに困難なるか察するに餘りある次第である。故に積極的攻擊によつて敵飛行機の根據地を破壞する外都市防空は勿論、國防の安全も全く期せられない時機に當面してゐる。もし近隣の大陸を制壓せらるゝに於ては日本の國防は危險極まりない。惟ふに滿洲は經濟上のみならず、國防上に於ても我が國の生命線であること論を俟たず。此の生命線を確保する爲めには滿洲

に集中し得る敵空軍を制壓し得るに足る大空軍の動員計畫に國防の根據を置かねばならぬ。陸海兩軍の整備と共に空軍の整備は絕對的必要である。空軍の整備によつて我國の國防はこゝに全く世界に冠絕せるものとなる。

皇國日本の大使命

あらゆる生物は適者生存の理法を辿るが如く、人類は向上の一路を進む。かくて向上なく文化の進展なき國家、民族は、全人類向上の過程に於ける貴き犧牲として悲慘なる沒落に陷る外なきものである。

人類は科學と機械を基礎とする交換貿易の西洋文化と、天地開發を基礎とする自給自足亞細亞文明との二大文明によつて進步する。卽ち機械の發明によつて積極的に生產增加の結果西洋少數の民族の生活は向上する。而もその機械の進步緩漫となるに及んで、消費節約を旨とする東洋大衆はその機械の應用を始め、玆に普遍的大量生產となつて全人類の生活は向上すると共に新たなる天地は開發さる。

然しながら全人類は機械應用程度の差等によつて過古幾千年の歷史的過程をその儘に、現在世界人類は差等ある生活を營んで居るものであると共に、嘗て偉大なる自給自足の文明を建設したる埃

及も土耳古もインカ三國も滅び又、燦然たる光輝を放てる交換文明のフェニキヤ、ギリシヤ、羅馬も共に滅亡を免れなかつたのであるが如く、今日の强國も弱國も永遠に此の儘固定するものではなく絶へず變化し、流轉して人類は向上の一路を辿る。

過去五千年に於ける西洋の交換文明と亞細亞の自給自足文明の對立は、機械の發明によつて西洋の世界制壓となり、その進歩の終點と共に亞細亞の進出が始まり、それが又、他の新しき機械の發明によつて西洋の世界制壓となる。かくの如く何時の時代も、歴史的の循環の理法を辿つて居る。その周期は時に五百年時に八百年となつて必ずしも同一期間を以て變轉するものにあらざるも、變轉の事實は必然的であつて、且、その變轉と共に世界の政治、經濟、思想は非常なる動搖を起し、幾多の國家、民族の興隆の反面に幾多の國家、民族はその犧牲として悲慘なる滅亡の悲運に陷つて居るものである。

先にコロンブスのアメリカ發見後、西洋交換文明は徐々に發展しフランス革命、英國の産業革命によつて完成せられて、之が自由、平等、議會萬能の思想となつて交換文明は人類至上の文化なるやの感を呈するに至つたのである。然し世界大戰と共に伊太利のファショ、獨逸のナチス、米國のN、R、A、――と歐、米には今や自由思想の影薄れて專政思想の流行を見つゝあるのは、之、取りも直さず西洋文化發展の停止を意味するものである。即ち、その主因は現代世界交換文明の指導勢

力であり、原動力たる汽車、汽船、その他主なる生産機械の進歩停止にあり、かゝる西洋文化の沒落に代つて消費節約、自給自足の東洋大衆は漸くその機械應用による發展途上に就き、こゝに東西勢力變轉期を示すに至つてゐる事實は何人も否定し得ないであらう。之を要するに自給自足に立脚せる精神文明の偉大なるは勿論、一方には又、機械生産、交換文明の大なる價値をも認めざるを得ない。然しその極端は共に一時的發展性の蔭に必然的沒落の運命を免るゝことが出來ないのである。故にどうしても玆に此の二大文明を調和し、人類永遠の文化を建設させねばならぬ。

誠に吾人は亞細亞文明發展の現在時機に唯自己發展のみに滿足すべきものではない。東西文化の對立により國家民族は永遠に興亡、流轉し人類は平和なる幸福の生活を營むことを得ない。どうしても新たなる文化を建設し人類に貢献せねばならぬ。

世界人類二十億萬人の過半十一億萬人は日本の近距離内にある。而も地形に於て大平洋幹線汽船航路は千四百粁の日本沿岸に平行し、幾多良好の港灣を有して居る、航空時代の世界幹線航空路は千島より臺灣迄四千粁の領土内を通過する可能性がある。眞に皇國日本は世界交換貿易の中心に位置すると云ふべきであると共に、三千年來自給自足によつて地は六千萬人の食を供給することを得、人は一君萬民打つて一丸とせる國民であつて盡忠報國の至誠に充ちて居る。

如斯き優秀なる天地人を備ふる皇國日本こそ、五千年來東西に發達せる自給自足の文明と、交通

交換文明とを調和し、永久不變の眞、善、美の文明を建設するべき重任を負擔するものであると確信するものである。神は必要の時機に吾人を三百年の眠より醒された。嘗て皇道精神の裡に佛敎を容れ、儒敎を抱擁消化せる如く今又機械生産交換文明の物質文化を消化し、その弊害を排除し人類五千年の苦闘によつて建設したる東洋の精神文化と西洋の物質文化とを調和し、最終、最善、至高の人類文化を作り、以て世界を指導せねばならぬ位置に運命づけられて居る。即ちこれこそ皇國日本に對する神の使命である。その達成は九千萬國民の双肩にある。

皇國日本はこの物心一如の新文化によつて人類に眞理想、眞生命を與へんとするものである。決して交通交換文明の如く交換貿易の競爭國なり、自給自足の民族を壓迫滅亡せしめ以て自己のみの向上發展を計るものではない。即ち東西文化の對立、暗中模索の人生に一導の光明を與へんとするものである。交換貿易本位の諸國にも、自給自足主義の諸國にも物心一如の新文化によつて必然の沒落より永遠の繁榮幸福を與へんとするものである。

此の物心一如の新文明建設の重大使命を有する皇國日本は、今日の非常時突破以上に幾多の難關を突破するの覺悟を要するのである。皇國日本は眞文化の建設者であり、その國防は眞理擁護の國防である。而して他を犯すものではない。

然るに今や、さきに詳述せる如く、立體的運動の航空機の發明進歩によつて三千年の光輝ある國

體の國防は正に危機に頻して居るとも云ふべきである。

航空と國民生活

しかるに、國民生活を離れて國家なく、亦國防なし。一切の國家事業は之總て國民生活と不即不離のものであつて、この理に反したるものはたとへ如何なる價値を有するものと雖もその存在乃至發展は絶對不可能である。

故に、國防といふも、畢竟その要諦は軍備と國民生活とを調和一致せしむるにあることは言ふまでもない。

武勳赫々たる皇國陸軍は建國の精神に則り、國家總動員を基礎とするものであつて國民の絶對的信頼を荷つて居る。

光輝ある皇國海軍は海軍々縮條約によつて一部の制限を受け、未だ十二分の力を具備して居らないが、海はわが國民生活の食道であると共に國家發展の大道である。故によく海軍は國民に理解され、國民生活と調和一致して國防の重責を負擔してゐる。

之に反してわが航空の現狀は全くわれ〳〵國民生活より遊離し、沒交渉である。その結果、國民航空としての航空の存在價値が薄弱となり、やゝもすればその發達が遲滯し停頓するのも蓋し當然

の歸結である。

しかるに航空の重大性は愈々擴大され、防空なくして國防なしと叫ばれる今日、吾人は玆にたゞならざる國防の不安を感ぜざるを得ない。

故に、空は將來國家發展上、陸、海に次ぐ交通の第三路であり、國家の生命線であると云ふ正しき理解の下に航空が國民生活と調和一致せざる限り民間航空の發展の途はなく、從つて一朝有事の際大空軍の動員を即事可能ならしめ、積極的國土防空を完備することは不可能である。

玆に於て、吾人は、國家百年の計を樹てゝ國土防空を完備する國民航空建設の必須要件として次の諸項を掲げ、以て速かに之が奬勵實施されんことを期するものである。

一、航空智識の普及を計り、國民航空の建設運動を起すこと

二、人口三萬以上の都市に飛行場を建設すること

三、荒蕪地、河川敷、砂濱を飛行場として整備すること

四、氣象觀測を全國的に整備すること

五、航空路、特に國外航空路を開拓すること

六、輕飛行機を一般に普及し、航空の經濟化を計ること

七、飛行士の技倆向上を計ること

八、學生航空聯盟の擴張充實を計ること

九、遊覽飛行、タキシイ飛行、航空寫眞、宣傳飛行、漁群捜査、密漁監視等各種航空事業を奬勵すること

一〇、豫備役飛行士、民間飛行士を以て義勇飛行隊を編制すること

一一、民間飛行士の養成機關を統制整備すること

一二、グライダーを奬勵すること

東西文化を調和したる眞善美の文化建設の爲め、その目的達成の聖戰に備ふべく、生あるものは勞力を奉仕せよ、財あるものは財を擲つて航空日本の礎を築け。

（おはり）

昭和十年一月

海軍少將　井上四郎

昭和十年二月二十五日印刷
昭和十年二月二十八日發行

頒價金拾錢

著者　井上四郎
東京市芝區田村町一丁目三番地
財團法人帝國飛行協會代表

發行者　北尾龜男
東京市京橋區京橋二丁目十三番地
東亞印刷株式會社

印刷者　佐々木恒太郎

發行所　東京市芝區田村町一丁目三番地
財團法人　帝國飛行協會
電話銀座(57)〇一六七番
三七〇三番
振替口座東京　二九六三六番

219

4
1